

令和 5 年 6 月 15 日現在

機関番号：34509

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00630

研究課題名(和文)話し言葉における使用実態調査に基づく日本語の否定表現の使用傾向の研究

研究課題名(英文) A Study of the Usage Tendency of Negative Expressions in Japanese Based on a Survey of Actual Usage in Spoken Japanese

研究代表者

野田 春美 (NODA, Harumi)

神戸学院大学・人文学部・教授

研究者番号：60237849

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：コーパスを使って、日本語の否定表現の話し言葉における使用実態を明らかにした。基本的な否定が約67%で、次に多いのは「ではないか」類と「のではないか」類、その次は、モダリティ表現であった。聞き手の認識を喚起したり要請したりする「ではないか」も、話し手の見込みを表す「のではないか」も、間接的である一方で、「否定」「疑問」という聞き手に強い印象を与える表現である。話し手は間接性を活用しながらも、倒置にしたり終助詞をつけたりしてやわらげる傾向がある。「わけにはいかない」については、理由の表現が後続する例が約半数を占めることを指摘した。Jポップの歌詞を資料とし、否定に関わる逸脱表現の実態も明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

会話の場所や地域などが異なる複数のコーパスを使い、話し言葉における広義の否定表現の使用実態を明らかにすることができた。これは基本的データとして日本語教育などに活用できるものである。使用の多かった「ではないか」「のではないか」の調査、及び「わけにはいかない」の調査によって、否定表現について、どのような形の文で使われるのか、どのような文脈で使われるのかといった観点からの考察が重要であることを明らかにできた。また、Jポップを資料とした調査と考察から、否定に関わる逸脱表現の実態も明らかにできた。これらは、日本語における否定表現の研究の今後の発展につながるものである。

研究成果の概要(英文)：The actual usage of Japanese negative expressions in spoken Japanese was clarified based on a corpus survey. Basic negation accounted for about 67% of the total, followed by the "dewanaika" and "nodewanaika", and then the modality expressions. Both "dewanaika", which evokes or requests the listener's perception, and "nodewanaika", which expresses the speaker's expectation, are indirect, but at the same time, they are expressions that give a strong impression to the listener as "negation" or "question". Speakers take advantage of indirectness, but tend to soften their expressions by inverting and adding final particles. As for "wakeniwaikanai", I noted that in about half of the examples, the expression of reason followed. The study also revealed the reality of deviant expressions related to negation in J-pop lyrics.

研究分野：日本語学

キーワード：否定表現 話し言葉 ではないか のではないか コーパス

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

日本語の否定の研究は、理論面に偏ったり、「しか～ない」のような特定の文型が研究対象とされたりすることが多かった。また、日本語の話し言葉において、どのような否定表現がどのように現れるのかについての研究はあまりなされていなかった。

2. 研究の目的

日本語の話し言葉を対象とし、どのようなことが、どのような否定を使って表現される傾向があるのかを明らかにすることを目的とした。なお、「行かない」「大きくない」のような典型的な否定だけでなく、否定辞を含む周辺の表現も幅広く対象に含めて、使用実態を把握することとした。

3. 研究の方法

(1)話し言葉のコーパスを用い、広義の否定表現の使用実態を把握する。使用頻度の高い否定表現などについては、詳しい考察を行う。

(2)話し言葉と共通性のある資料として、J ポップの歌詞も調査対象とし、否定に関わる逸脱表現についての考察を行う。

4. 研究成果

(1)日本語の話し言葉における広義の否定表現の使われ方について、2つの会話コーパス(「現日研・職場談話コーパス」「名大会話コーパス」)を使って、話し言葉における、否定辞を含む表現の使用実態を明らかにした。表1の通りである。

表1 2コーパスにおける否定を含む表現の出現状況

職場談話			名大会話		
分類	件数	割合	分類	件数	割合
基本	2630	67.4%	基本	18647	67.4%
「ではないか」類	333	8.5%	「ではないか」類	3456	12.5%
「のではないか」類	273	7.0%	「のではないか」類	1567	5.7%
語内・慣用	212	5.4%	評価(必要)	1069	3.9%
評価(必要)	196	5.0%	語内・慣用	970	3.5%
「かもしれない」など	108	2.8%	「かもしれない」など	843	3.0%
「わけだ」など否定	49	1.3%	「わけだ」など否定	305	1.1%
「のだ」否定	23	0.6%	評価(不必要)	200	0.7%
評価(非許容)	20	0.5%	評価(非許容)	142	0.5%
「いけない」類	18	0.5%	「いけない」類	133	0.5%
評価(不必要)	18	0.5%	「のだ」否定	100	0.4%
否定依頼・禁止	10	0.3%	二重否定	93	0.3%
評価(許容)	7	0.2%	否定依頼・禁止	81	0.3%
依頼・勧誘	4	0.1%	依頼・勧誘	34	0.1%
評価(後悔)	2	0.1%	評価(許容)	11	0.0%
二重否定	1	0.0%	評価(後悔)	11	0.0%
計	3904		計	27662	

(野田(2022))

2つのコーパスにおいて否定を含む表現の使用傾向が類似していることがわかる。1%を超える7種類の順序はほとんど同じである。表1には含まれていないが、「日本語日常会話コーパス」のモニター版でも、ほぼ同じ傾向であった。

表1では、《基本的な否定》が約67%、次に《「ではないか」類》《「のではないか」類》が続く、合わせて10数%、その後、《語内・慣用》や《評価(必要)》、《「かもしれない」など》《「わけだ」など否定》が続く。会話の場所や地域などが異なる2つのコーパスで類似した傾向が出ていることから、話し言葉における否定辞を含む表現の使用状況は表1に示すような割合なのだと考えられる。

使用の多いことが確認された「ではないか」「のではないか」についてさらに調査、考察をおこなった。「ではないか」に倒置・付加が多く見られること、「のではないか」では自思考引用が比較的多く、繰り返されることもあること、「のではないか」は、「か」以外の終助詞など

を伴う例が 40%以上見られることはいずれも、やわらげようとする意識と関係していると考えられる。聞き手の認識を喚起したり要請したりする「ではないか」も、話し手の見込みを表す「のではないか」も間接的な表現であるという面をもつ一方で、「否定」「疑問」という聞き手に対して強い印象を与える可能性もはらむ表現である。話し手は、その間接性を活用しながらも、表現が強くなり過ぎないようにやわらげるための手段をとる傾向があることが明らかになった。

(2)否定辞を含むモダリティ表現「わけにはいかない」について、4種類の話し言葉コーパスを用いた調査を行った。「わけにはいかない」は、先行研究において評価的な面と「不可能」を表す面との関係が論じられてきた形式である。基本的な意味を、「事態の実現が何らかの事情によって許容されないと話し手が判断すること」と捉えたうえで、「日本語話し言葉コーパス(CSJ)」「名大会話コーパス」「現日研・職場談話コーパス」「日本語日常会話コーパス(モニター公開版)」を用いて使用実態の調査を行った。

特に、後続表現の調査において、興味深い結果が得られた。表2に示す。

表2 「(ない)わけにはいかない」の後続表現

	理由	断定	引用	確認要求	逆接	推量	他	計
CSJ	77	31	19	5	6	7	14	159
名大	20	9	2	4	3	1	5	44
職場	7	0	0	1	0	1	1	10
日常	7	3	0	1	0	0	1	12
計	111	43	21	11	9	9	21	225

(野田(2021b))

表2に示すように、理由の表現が約半数を占めることが注目される。これが「わけにはいかない」の特徴であることを検証するために、「ないわけにはいかない」に限定して、後続表現を類似形式と比較した結果を表3に示す。

表3 不可避類3形式の後続表現

	理由	断定	引用	確認要求	逆接	推量	自問	他	計
ないわけにはいかない	8	6	0	4	1	2	0	1	22
ざるをえない	12	39	49	1	6	6	2	47	162
しかない	10	65	45	18	14	12	10	23	197

(野田(2021b))

「ざるをえない」「しかない」には、後に理由表現が続きやすいという傾向は認められない。したがって、「(ない)わけにはいかない」に特徴的な現象と考えてよいであろう。「わけにはいかない」は、事態の実現が何らかの事情によって許容されないと話し手が判断することを表す。多くの場合、実行を望む行為が許容されないということを表示するため、「その結果、どうなるのか」という内容が後に続きやすいのだと考えられる。

そもそも否定表現は肯定事態を前提として使われるものであり、文脈や場面との関係が重要である。否定辞を含むモダリティ形式など広義の否定表現においても、文脈との関係をさらに明らかにしていく必要がある。

(3)話し言葉と共通性のあるJポップの歌詞を資料として、否定に関わる逸脱表現の考察を行った。否定の形に関する逸脱、「ず」に関する逸脱、副詞と否定の呼応に関する逸脱、とりたて助詞と否定の共起に関する逸脱、アスペクト表現と否定の共起に関する逸脱に分類して考察を行った。必要に応じてコーパスを用いた補充調査を行い、歌詞に特有の逸脱であるのか否かを検証した。それぞれについて、歌詞の逸脱表現に関する6つの観点との関係も示した。野田(2021a)に示した、a.規則に原因がある逸脱表現、b.短く表現しようとした逸脱表現、c.使用頻度が少ないため逸脱に気づきにくい表現、d.感情のままに綴った(かのような)逸脱表現、e.雰囲気を出す逸脱表現、f.メロディにのせる逸脱表現の6つである。また、「言えずの{言葉/“ごめんね”}」のような逸脱表現が引き継がれていく現象があることも指摘した。

- 野田春美 (2021a) 「J ポップの歌詞に見られる逸脱表現」金澤裕之・川端元子・森篤嗣編『日本語の乱れか変化か これまでの日本語、これからの日本語』、pp.69-87、ひつじ書房
- 野田春美 (2021b) 「話しことばにおける「わけにはいかない」の使用実態 コーパス調査に基づいて」『人文学部紀要』41、pp.17-27、神戸学院大学人文学部
- 野田春美 (2022) 「話し言葉における「ではないか」と「のではないか」の使用傾向」『人間文化』52、pp.1-15、神戸学院大学人文学会
- 野田春美 (2023) 「否定に関わる逸脱表現の考察 Jポップの歌詞を題材に」『人文学部紀要』43、pp.77-87、神戸学院大学人文学部

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 野田春美	4. 巻 41
2. 論文標題 話しことばにおける「わけにはいかない」の使用実態 コーパス調査に基づいて	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 人文学部紀要（神戸学院大学人文学部）	6. 最初と最後の頁 17-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 野田春美	4. 巻 52
2. 論文標題 話し言葉における「ではないか」と「のではないか」の使用傾向	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 人間文化（神戸学院大学人文学会）	6. 最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 野田春美	4. 巻 43
2. 論文標題 否定に関わる逸脱表現の考察 Jポップの歌詞を題材に	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 人文学部紀要（神戸学院大学人文学部）	6. 最初と最後の頁 77-87
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 1件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 野田春美
2. 発表標題 「ではないか」「のではないか」の談話機能 3種のコーパスに基づいて
3. 学会等名 第27回人文学会研究会（神戸学院大学）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 野田春美
2. 発表標題 会話における否定表現の使用傾向
3. 学会等名 社会言語科学会（招待講演）
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関